

カナダ・ジャージー視察研修報告

日本ジャージー登録協会（高村祝次会長）並びに全国ジャージー酪農協議会（加藤賢一委員長）は、昨年11月7日から13日までの7日間、カナダのローヤル・ウインター・フェアのホルスタインショー並びにジャージーショーをメインとした視察研修を行った。ここにその概要をご紹介します。

【1. 日程概要】

全国組織のジャージー関係団体では、視察研修は国内のジャージー主産地で定期的に行っており、一昨年11月には群馬県・神津牧場への視察研修で大雪に見舞われたことは記憶に新しい。今回はカナダのローヤルをメインとした視察を企画したところ、北海道から酪農家並びに関係者11名、岡山県4名、熊本県3名、事務局1名で、総勢19名が参加した。

また、ツアーの日程として観光は極力ゼロにした結果、フライトで前後1日ずつ必要なため、正味は5日間。そのうち1日間は牧場視察で費やし、残り4日間をショーの視察に当てた。



【トロント郊外のクオリティ牧場にて】

【2. 視察概要】

まず、牧場視察はトロント郊外のクオリティ牧場、さらに、プレザント・ヌック牧場、ブレンビー牧場、ブライドン牧場、スプルス・アベニュー牧場の5戸で、ホルスタイン、ジャージーのいずれの品種にあっても長い歴史のあるブリーダーであり、かつ泌乳能力・体型成績の優れた牧場である。やや強行ともいえる日程ではあったが、参加者の協力もあってスムーズに移動できた。

また、ローヤル・ウインター・フェアはトロント市内の大規模パビリオンにおいて、ありとあらゆる家畜の生体とチーズや皮製品など畜産物の展示・共進会が行われているイベントで、1922年にイギリス国王・ジョージ5世の時代に始まり、今回が95回目と長い歴史がある。

フェア自体は約10日間の日程が組まれており、平日の昼間は何十台ものスクールバスが連なり、先生に引率された小学生や中学生が押し寄せる。当然のこと休日は多くの家族連れが乳母



【左の写真がローヤル会場入り口】

車を押しながら集まる

ので、会場は大混雑。言い換えるならば、カナダの国策ともいえる農業、中でも畜産という産業を教育する絶好の機会と捉えているからと考えられる。

一方、夕方になると、ドレスアップした紳士淑女がメイン会場で毎夜催されるホースショーに押し寄せ。我々の想像を超えるホースショーなので、当然のこと入場料も別格となる（日本円で1夜3千円程度）。かなり以前にはイギリスのエリザベス女王もご覧になったようだ。

【3. 牧場視察の概況】

(1)ホルスタイン・クオリティ牧場は市街化の波

クオリティ牧場はホルスタイン種、中でもショウカウをメインとする歴史のある牧場で、近隣にも有名牧場がかつては多く存在した。雄牛も多く生産しており、わが国の酪農関係者とも深い縁があるところで、1983年と1995年、2009年の3度、ホルスタインのマスター・ブリーダーの荣誉に浴している。クオリティ・BC・フランスコからギブソン・フィンスコ、ゴールドウィン・フランスコの3世代が95点以上という審査成績はカナダで初めてである。



【上の写真は分娩間もない初産の牛たち】

牛舎はかなり以前に建てられたニューヨークタイストールであるが、牛は良く手入れされ、驚くような点数が入っていたことが印象的。ローヤルにも数頭行っているので、初産の分娩直後のものが多かったが、サイズはともかく、前軀から後軀にかけての移行が良く、高さに見合った長さ幅のあるものが多く見受けられた。乳房は当然のこと良く揃っている。

ただし、現在は周辺を大規模な工業団地に囲まれてしまい、パドックに放された牛が倉庫をバックに記念写真を撮られるという奇妙な様相を呈している。

なお、種子でかなり手広く商売をしており、今回のローヤルにも協賛している。

(2)ジャージー+ホルス 実家で牧場継続

続いて訪れたプレザント・ヌック牧場は、元々はジャージー種だけのブリーダーであったが、婿さんをエビホルムから迎え入れた関係で、ホルスタイン種も十頭ほど搾っている。石作りの開拓時代を思わせる古い牛舎に続いて、新しく天井の高いフリーバーン牛舎をつなぎ合わせ、約60頭を搾っている。ローヤルにもジャージー





【肋が良く開張しているプレザントヌックのジャージー。ルーサンの乾草に食いついている】

脂肪量に基づいているので、経営は問題ない。ショウに金がかかるのでトントン。」とのこと。

ちなみに、泌乳能力の平均は、ホルスタイン10頭が乳量12,963キロ、乳脂肪545キロ、蛋白406キロ。ジャージー40頭が乳量7,212キロ、乳脂肪387キロ、蛋白277キロ。

審査成績は、ホルスタインが2歳級VG4頭、他にVG2頭、EX5頭。ジャージーは2歳級VG10頭、2歳級GP3頭、他にVG10頭、EX19頭

なお、婿さんは日本の機械メーカーであるKubotaの関連会社に勤めている。

13頭を出品している。

当主のジュリー・エビイさんは2006年に結婚したが、実家の両親がプレザント・ヌック牧場を2008年に廃業すると決めたとき、彼らが牧場の継続を希望していたことから、乳脂肪のクオータを買い取り、牛も選り抜きを提供してもらった。

「ジャージー数十頭の搾乳で経営が成り立つのか？」との質問に対して、「カナダの乳価制度は乳

(3) ブッチャーファミリーで連綿と続く歴史



【写真は真新しい牛舎とピコルチューブに入れられたサイレージ】

3戸目のブレンビー牧場は、ジャージーで2017年にマスター・ブリーダーに選ばれている。牧場の案内をしてくれたジェイソン・ブッチャーの祖祖父ハロルド・ブッチャーが1937年にベル・シティ牧場を興し、ジャージー飼育と牛乳の加工をオンタリオ州ブラントフォードで始めた。その息子、祖父であるグラント・ブッチャーは兄のキース・ブッチャーとともに牧場を手伝ったが、その後、独立し、グランクレア・ジャージー牧場を始めた。

グラントとクラリアン夫妻は7頭のジャージーから始めたが、40年間に250頭まで増やした。彼は同時に世界ジャージー協議会の終身会員として活躍した。オールアメリカンショウにも25年以上出品したほか、他のカナダの若い後継者にも出品を勇気づけてきた。ローヤルにも兄のキースがジャッジであった第2次世界大戦時以外は

もちろんのこと出品を続けた。1989年にはローヤルのジャージー出品ショウマンに対して、「グランクレア賞」を創設するに至っている。

グラントの3人息子の一人、ブレント・ブッチャーはジェイソンの父に当たるが、1979年にホルスタインのモナーク牧場で育ったベティと結婚。1985年にオンタリオ州エアシャーに自分達の牧場を購入し、ブレンビー牧場と名付けた。その後、ローヤルにも継続して出品しており、2003年と2007年には「積極的なブリーダー」として賞を受けている。2009年にはブレンビー・ギラー・ザンブカ号E X 95点-4Eで3歳級の第1位に選ばれ、オール・カナディアンに選奨された。2年後にはアメリカのデーリーエキスポで5歳級の上位に入賞している。

ジェイソンは2010年に85エーカーの敷地に牛舎施設一式を新築したが、オンタリオ州の農場でも



【経産牛は2列の対尻式。隣接して育成の牛房】

最も高価な場所にある。従って、乾草とコーンは購入、ヘイレージとコーンサイレージのみ自給している。繋ぎ牛舎で搾乳牛は75頭。最近の泌乳成績は乳量7,905キログラム、乳脂量431キログラム、蛋白312キログラム。審査成績はE X 15頭、V G 44頭、G P 20頭。

(4)ブライドンはロボット搾乳へ切り替え



4戸目の訪問先であるブライドン牧場の当主、ブライアン・セイルスさんは、3年前の北海道全共のジャージー交流会で講演を行ってくれた方であるが、後述のスプルー・アベニュー牧場の長男で、1964年に21歳で独立して牧場を開設した。ホルスタインではブライドン・アストロ・ジェットが一世を風靡した種雄牛であり、ジャージーではブライドン・リメイク・コメカやブライドン・ジャマイカの精液が、わが国に輸入され娘が数多く登録されている。

1986年と2011年の2度、ジャージーでマスター・ブリーダーに、2010年にはホルスタインでマスター・ブリーダーに選ばれている。約30年前に筆者が訪れたときは繋ぎ牛舎にホルスタインとジャージーがほぼ同数飼われていたが、3年前に牛舎改造し、フリーバーンとロボットパーラーを新築した。これにあわせてジャージー単独に切り替えた。ローヤルには我々が訪れた夜に搬入





するとのことで、自己所有のトラックに家畜輸送用のワゴンを取り付け、未経産 3 頭、経産 4 頭を積み合わせて行く準備をされていた。

現在約 100 頭を搾乳しており、平均乳量は 28%、乳脂肪率

5.45%、蛋白率 3.85%、牛群構成比は初産が 32%で、3産以上が 50%。ロボットパーラーでは平均で 3.1 回搾乳。繁殖成績は全体の受胎率が 57%、初回受胎率が 54%と良く、これはコンポストバーンにしたことで発情発見が高まったことによる。

新しく建てられたフリーバーン牛舎は木造のトラスト構造で、周囲に柱があるものの、真ん中に柱が無い。これは、牧場の所在地であるオンタリオ州パリスはトロントから西に約 1 時間の位置にあり、冬の強風と寒さは厳しいが、降雪量が少ないので、中心に柱が無くても耐えられるとの説明があった。なお、バーンの天井に備え付けられた巨大な換気扇に思わず目が行ってしまった。



(5) スプルス・アベニューで見た真新しい牛舎



最後に訪れたスプルス・アベニュー牧場は、1932年にジャージーを飼い始めた歴史あるところ。説明してくれたディーン・セイルス・ジュニアは 5 代目だが、プライドン牧場のプライアンは叔父に当たる。

耕地面積は 750 エーカーで、2017 年 6 月に牛舎を新築したばかり。30 畝 × 100 畝の真新しい牛舎は内側全面が白いペンキで塗られ、天井が高いのが印象的。冬は寒いのかという質問に対して、まだ新牛舎での経験がないが、外気が -30 度でも内部は -2, 3 度だろうという回答。フリーストールと独房で仕切られ、パーラーは 10 頭ダブル。ホルスタインとジャージー合わせて 250 頭飼育し、搾



乳は 90 頭前後。他に 2 万 5 千羽のブロイラーも飼育しており、いずれもそれなりの収支があるという。



【いまは使っていない古い牛舎。筆者は約30年前に訪れている】

の変動がなく、思い切った投資ができるのかもしれない。まあ、できない方は廃業の憂き目にあうかもしれないが。

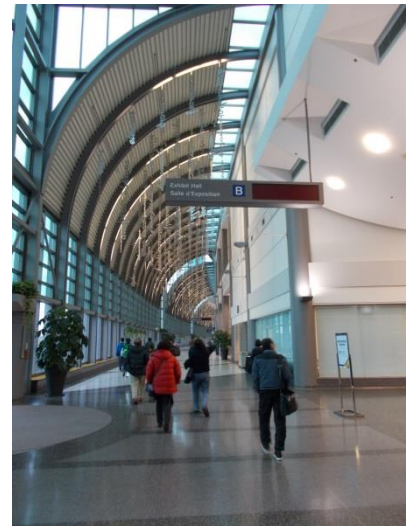
この牧場の若い後継者（30歳台）にいまの時代にこれほどの牛舎を建てるに幾ら掛かるのかと尋ねたところ、建物だけで約1億円とか。この国では補助金という仕組みは無いので、自己資金以外は全て銀行からの借り入れとなる。要するに、農地についてもカナダはかなり高いらしく、これがあるので銀行からの融資が可能と考えられる。加えてカナダでは農業が国策で保護されており、乳脂肪の割当（クォータ）という制度があるので、それほど乳価

【7. ローヤル・ショウの概況】

目を見張る正確なフレームと乳房

乳牛のショウでもアメリカのワールド・デーリィ・エキスポと双璧をなすローヤル・ウインター・フェアの乳牛部門のショウは、ホルスタインを筆頭にエアシャー、ジャージー、赤白ホルスタインの4部門で審査が行われる。また、最終日にはこの4部門のチャンピオン牛が一堂に会し、シュープリームチャンピオンが選ばれる。

今回の視察研修ではエアシャーの除く3部門でショウを見る機会があった。



【会場の内部。各アリーナへの通路】

450頭をテキパキと

ホルスタインは出品頭数が約450頭と多いことから、未経産の3部は「リング・オブ・エクセレンス」と名付けられた平場の審査場で11月9日の午後に、残りの未経産4部と経産はパビリオンでも最も収容頭数が多い「リコー・コロシウム」で翌10日に早朝から行われた。この会場は夜にホースショウが行われるところなので、北海道共進会場の2階椅子席部分を充実させたような会場であり、夜には正装した方々がディナーを楽しみながらショウを楽しめる施設が備えられている。

ジャッジはケベック州のピエール・ボーレット氏で、その姉メラニー・ボーレットさんがアソシエイトを務めた。

個体出品の部は、未経産は夏生まれ子牛（3～5か月齢）を皮切りに子牛インターミディエイト級までの7部、経産は1歳級から始まり生涯乳量6万キロ超までの9部、加えて、未経産3頭1組の牛群クラスや経産牛3頭1組の牛群クラス、それに、ジュニアとインターミディエイト、



【審査場隣の幕舎。誰でも入れる。赤白もハイレベル】

シニアのチャンピオン決定と最後にグランドチャンピオン審査など、盛り沢山の仕事を非常にテキパキと指示をし、序列を決めていく姿が印象的であった。特に、出品頭数の多い部では50頭以上の牛が会場内で身動きがとれない中、平然とジャッジして回るのは肉体的にも頑丈だからか。とはいえ、同じ会場で夕刻からはホースショーが開催されるので、早朝7時半から開始し、午後4時には終わらせるという使命がジャッジに与えられており、この点は大いに参考になった。

また、審査の合間には長年にわたり酪農業界に貢献してきた関係者を称える賞、例えば「オーナー・アワード」や「ハーズマン・アワード」などで、その度ごとに複数の方々が会場内に集まり、賞品を送られ、記念写真に収まる光景はお馴染みのものか。特に、OBクラスの方々が眩しそにしていたのが印象的。

一方、出品牛の全体的な印象としては、まず大人しいこと、よく調教されていること。さらに、骨格構造が正確で、特に乳用強健性に富む牛ばかりだったこと。歩様も素晴らしい。このことは未経産・経産とも共通である。乳房については、さすがに分娩からの時期にもよるのか、当日の調整がうまくいかなかったものも散見されたが、前乳房の付着の強さと後乳房の高さ・幅、乳頭配置の正確さは特筆すべきであり、いずれの牛もベストアダーであり、チャンピオンにできると感じた牛が勢揃いしていた。



【上はリング・オブ・エクセレンス。列の右は牛を誘導するリングマン】



【下はリコー・コロシウム。観覧席から見下ろすのでやや見づらい】



【上は2歳ジュニアの最終ジャッジ】



最終的なグラチャン戦は、各部の第1位牛が勢揃いし、リードマンはお揃いのTシャツを羽織り執り行われた。演出にも工夫があり、会場の照明がほぼ落とされ、1頭ごとにスポットライトが当たり、ポップ調の音楽が流され、観衆の拍手を誘う中、ジャッジが幾度も牛の周囲を歩き回り、最後にグラチャンを選んだあとは大歓声

に包まれるというもの。ホルスタインの部では4歳級3産目のコーベイル・デンプシー・ディーナ・4270ET（父デンプシー、アメリカ・ミルクソースジェネティクス他の出品）が選ばれた。スタイリッシュで抜群の乳房であったが、この牛は9月のエキスポでもリザーブグラチャンであったとのこと。

ジャージーには260頭

さて、今回の主な視察の目的であったジャージーショーは、11日に「リング・オブ・エクセレンス」、やはり早朝から午後3時過ぎまで行われた。

ジャッジはオンタリオ州ブオーカーブレイ牧場のプレント・ウオーカー氏、アソシエートは弟のスコット・ウオーカー氏。ホルスタインを担当したピエール・ポーレット氏とは対照的に、淡々と審査し、講評をするところが印象的であり、最終的なグラチャン戦でも牛に近づくことなく、遠くから牛の名前を呼び、「文句なしにこの牛が良い」と講評するのが逆の意味で好評であった模様。

出品は未経産6部、経産が8部で、約260頭の個体出品があった。その他、ジュニア、インターミディエイト、シニアのチャンピオン戦があり、さらに牧場牛群に加えて、いろいろな関係者がジャージーの振興のため賞を設けており、カタログに掲載されているだけでも30点以上

数えられた。従って、各部が終了する度にそれらの賞品授与セレモニーが行われていた。

最終的なグラチャン戦は、ホルスタインと同様に各部の第1位牛が勢揃いし、リードマンはお揃いのTシャツを羽織り執り行われた。演出も同様であり、これは一般観衆もショーを見る場所に大勢いることから、消費者を意識した工夫と考えられる。最終的なグラチャンは7歳5産目のマスキー・イアトーラ・マーサ（父イアトーラ、アメリカ・ミルクソースジェネティクス出品）が選ばれた。それほど大柄な牛ではないが、スタイリッシュで乳用性が極めて優れ、抜群の乳房であった。この牛は9月のエキスポでもグラチャンであったとのこと。

その後、同日の夕刻、エアシャーと赤白ホルスタイン、ホルスタイン、ジャージーの4品種のチャンピオンが集まり、シュプリーム・チャンピオン戦が行われた。審査はそれぞれのジャッジが集まり、協議し、最終決定はホルスタイン担当のピエール氏。別掲写真のとおり、ジャージーのマーサが見事選ばれた。なんと3年連続の快挙である。



【上はカーフクラス。圧倒的に女子のリードが多い】



【上は4歳級。肋が体の上部から開張。乳房もよく揃っている】



【マスキー・イアトーラ・マーサ（父イアトーラ、アメリカ・ミルクソースジェネティクス出品）】

最後になるが、今回の視察では牛を中心に研修を行ったが、「牛は草食動物であり、粗飼料を十分に食べてこそその能力を発揮できる」ということを再認識させられた。牧場視察であってもショウの会場であっても、カナダの石灰岩土壌で育ったアルファルファの乾草が十分に与えられ、それを飽食している。当然のこと、正確な骨格構造をしており、その下にある乳房は上から下まで幅がある。斜め後ろから後肋を見ると、西洋梨のような下っ腹ではなく、上部から肋が張り出したリング型の肋腹を呈している。聞くところによると、オンタリオ州は乾燥地帯なので、アルファルファは刈り取ったら反転せず、畑で数日おけば乾草になる。これをビッグベラーに仕上げれば倉庫にうずたかく積んでおける。日本では真似のできないことだが、これこそが本来の牛の飼い方と感じた5日間であった。

末筆ながら、今回の視察研修の実施に当たっては、通訳はもとより、牧場視察の事前交渉やホテルの手配その他で北海道帯広市の株式会社十勝畜産貿易には大変お世話になり、スムーズな日程をこなすことができた。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。（文責：大西）